



発行：小網代ヨットクラブ
〒238-0225
神奈川県三浦市三崎町小網代1385-18
Tel 080-9571-4663
編集：広報委員会
編集長：里吉美恵子

小網代通信

2019年 2月号 VOL-248

今月の内容

・連絡事項	編集委員	1ページ
・「ヨット讃歌・熱海ランデブー・夏祭り」	大谷 正彦 (KELONIA)	2~4ページ
・「海・陸のちょこっと情報」	編集子	4ページ

連絡事項 (編集委員)

1. < 定時総会 開催します >

日時：2月13日(水)19:00~21:00 会場：三田 駐健保会館 4階 大会議場
郵送された資料と艇メンバー表をご持参ください。18:30~19:00に同会場にてフリート総会あり。

2. < KFR表彰式・懇親会にて2019年度コミッティ担当決定 >

後期優勝艇と年間優勝艇の表彰式と懇親会が参加者75名で1月20日(日)に行われました。2018年の後期優勝艇は「アルファ」、年間優勝艇は「SHARK X」でした。この場で、1月から適用された小網代レーティングについて伊藤計測委員長から説明がありました。懇親会は、ご寄付いただいた飲み物と、乾き物のおつまみ、そして野村レース委員長自ら調理したブロッコリーとウインナーソーセージが、おつまみに彩りを添えました。また、2月~12月のコミッティ担当抽選会も行われ、他にゲームや「スマホでヨットレース」などの話題で大いに盛り上がりました。



【小網代ヨットクラブウェブサイト情報】 URL <http://koaziroyc.jp>

【次回予定 総務委員会 2月18日(月)18:30~21:00 駐健保会館4階会議室(JR田町駅より徒歩10分)】

2019. 2月号-1

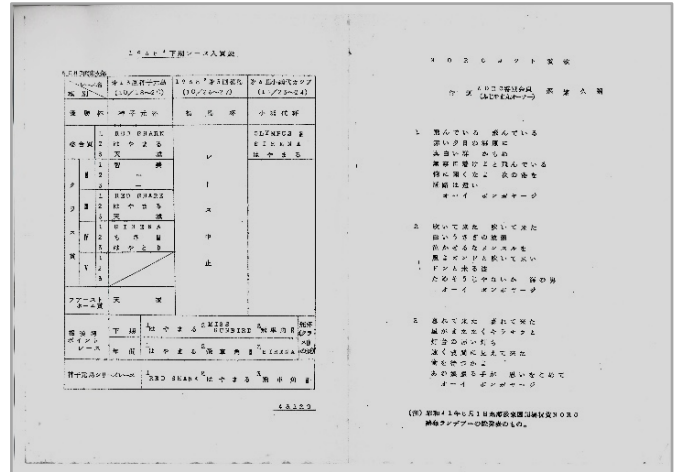
ヨット讃歌・熱海ランデブー・夏祭り

KELONIA 大谷 正彦

皆さんの中に「オーイ ボンボヤージ」と聞いて、すぐ「あゝ あの歌ね」と数節を歌える人はもう小網代でもわずかになってしまったのではないだろうか。

1965(昭和40)年8月「熱海ランデブー」の時に会場で歌った<ふじや丸>船主 森繁久彌作詞の「NORCヨット讃歌」である。

2年前「小網代ヨット史」(白崎謙太郎著)編集作業の際、この歌詞を懸命に探したが見つけることができなかった。昨年末に自宅の古い資料を片付けていたら、偶然その歌詞を見つけた。右図:B4版の資料で発行者:NORC 関東支部 '68.12.9 「1968 下期レース入賞艇」の表があり、その右面に「ヨット讃歌」が載っている。上記「熱海ランデブー」から3年経過後の資料であるが、この頃までは表彰式などの際にこの歌が歌い継がれていたことが分かる。



さて、発見した歌詞を抜き出して紹介する。

題名:「NORCヨット讃歌」

作詞:NORC特別会員 森繁久彌(<ふじや丸>オーナー)

1965年8月 熱海後楽園開場祝賀 熱海ランデブーの際に発表

- | | | |
|--|--|---|
| <p>1. 飛んでいる 飛んでいる
赤い夕陽の海原に
真白い群かもめ
無事に着けよと飛んでいる
俺に聞かぬよ 次の港を
潮路は遠い
オーイ ボンボヤージ</p> | <p>2. 吹いて来た 吹いて来た
白いうさぎの波頭
泣かせるなメンスを
風よズンドと吹いて来い
ドンと来る波 ためそうじゃないか
海の男
オーイ ボンボヤージ</p> | <p>3. 暮れて来た 暮れて来た
星がまたたくキラキラと
灯台の赤い灯も
遠く波間に見えて来た
俺を待つかよ あの娘振る手が
思いをこめて
オーイ ボンボヤージ</p> |
|--|--|---|

曲は歌手 三橋美智也氏の「赤い夕陽の故郷」で、当時ヒットしていた曲なので、その替え歌として誰でも口ずさむことができた。森繁氏は、当時「ダークダックス」(男性4人のコーラス・グループ)が歌って流行していた「雪山讃歌」(雪よ岩よ われらが宿り 俺たちちや街には住めないからに——)(西堀榮三郎作詞、曲:アメリカ民謡「いとしのクレメンタイン」の替え歌) に対抗する「海の男の歌」を意識して作詞したのではないだろうか。

三橋美智也氏は、渡辺修治設計のヨール<アニー>(43ft)の船主で、油壺湾にニス塗りの優美な艇を浮かべていた。なお、同氏はこの熱海ランデブーには参加していなかった。

赤い夕陽の故郷

歌: 三橋美智也
 作詞: 横井弘 作曲: 中野忠晴

呼んでいる 呼んでいる
 赤い夕陽の故郷が
 うらぶれの旅に行く
 渡り鳥を呼んでいる
 馬鹿な俺だが あの山川の
 呼ぶ声だけは
 おーい 聞こえるぜ

【過去資料より】

「熱海ランデブー」(初回) (1965年)

「小網代ヨット史」の中、渡辺修治設計艇の歴史の章で、森繁久彌のくふじやま丸の項(P34～35)で、「熱海ランデブー」について述べているが、その一部を引用する。

1965年、<蒼龍>の船主・田辺英蔵が社長に就任した「ホテル熱海後楽園」が開場した。田辺は開場のセレモニーを「熱海ランデブー」としてホテルの前の海面にクルーザーを集結させ、クルーをホテルに招き盛大なレセプションを行った。十数隻のクルーザーが集結し、中でも小網代艦隊は数多く参加した。豪華なご馳走を振舞われ、宴会場のステージでくふじやま丸で参加した森繁久彌の指揮で海の歌を歌い、大いに盛り上がった。

ホテルの円形大ホールで壇上の森繁氏が、大きな模造紙に達筆で書かれた歌詞を指しながら参加者全員で合唱した。即興の詩だったようで歌詞の配布はなかった。熱海城をバックにした高層ホテル、モダンな観覧車、遊園地、巨大な「ふじやま丸」が印象的だった。

最近、飯島征四郎氏から「この詩を知った作曲家 古賀政男氏が森繁氏に是非にも作曲させてほしいと申し入れたが、森繁氏は作詞した目的が違うと断った」というエピソードを聞いた。

「熱海ランデブー」(第2回) (1966年)

記録によれば、好評を得た熱海ランデブーは翌年も熱海後楽園で田辺帆走委員長のもとに行われた。この時はNORC主催で関東支部上期レースの表彰式も行われた模様。森繁氏は不参加だったようであるが「NORCヨット讃歌」を大合唱したと報告されている。私自身は第1回の思い出が強く、第2回に参加したかどうかは定かではない。

1966年8月7日(日)快晴、7時頃からボツボツ白い帆を張ったヨットが入港し、12時のパーティー開始時には18隻約130名の乗客をお迎えしました。正午よりNORCの関谷会長の挨拶があり、昼食をとりながら舞台では後楽園よりサービスで大漁音頭の歌と踊りが興を添え、そのあと江の島フリートNORO IIのクルーの皆さんの元気あふれ、且つ“センスがいっぱい”の海の歌の披露があり、最後にNORCヨット讃歌の大合唱で宴を閉じ、その後は大浴場で汗を流す方、遊園池で童心に返られる方、或はプールで河童と酒落込む方等、それぞれに楽しめた後4時過ぎ、全艇岸壁を離れました。
熱海ランデブー帆走並歓迎委員長田辺英蔵 NORCニュース第11号より

ランデブー・夏祭り・表彰式等 過去資料に現れたものから	
p数字は小網代ヨット史ページ番号	
年月日	ランデブー・夏祭り・表彰式 など
1954.07.17、18	小網代ランデブー 小網代マッケンジー氏別荘前 p121
1955.07.09	小網代ランデブー 小網代マッケンジー氏別荘前 p121
1957.08.10、11	小網代ランデブー 小網代マッケンジー氏別荘前 p121
1964.10月	東京オリンピック 江の島でヨットレース実施
1965.08.01	熱海ランデブー 熱海後楽園開所式 NORC艇は招待参加 p35
1966.08.07	熱海ランデブー 熱海後楽園 NORC関東支部主催 表彰式も実施
1967	ランデブーはなし 上期レース表彰式は江の島で行われた p83
1968.07.14	「西伊豆三津浜ランデブー」を計画 ⇒ 受け入れ側の事情で取止め
1968.08.03、04	「NORCカーニバル(仮称)」 シーボニア敷地(開業直前) 「カーニバルの報告」p132
1969.08.02、03	「NORC関東支部夏祭り」 シーボニアにて 「夏祭りの報告」p132
1974.08.31	「NORC夏祭り」 佐島マリーナ
1977.08.31	上期レース表彰式 船舶振興ビル
その後	都心で表彰式をやるようになり、船で集まるという意識は薄れ、ランデブーという言葉も使われなくなった。関東支部全体の夏祭りも途絶えた。

【参考】 ランデブーとは？
ランデブー『名』(rendez-vous) (仏) ① 出会うこと。特に、男女が相会うこと。あいびき。 ② 二隻以上の宇宙船が、接近してドッキング飛行するため、宇宙空間で出会うこと。 ③ 軍隊、船舶の集結する場所・地点。 【出典 精選版日本国語大辞典】
①(あいびき)の意は最近では使われなくなりつつある。ここでは③(船舶の集結する場所・地点)の意味である。軍艦が海上の1点を決めて集結することをランデブーと称したものと思われる。戦後の外洋ヨットが米英駐留軍の軍属たちが自艇を持ちこんで始めたことは事実であるが、日時を決めてヨットが1か所に集合することを軍隊用語を持ち込んで「ランデブー」と名付けたのであろう。(当事者ではないので、推測)

【まとめ】

- ① 「ランデブー」の始まりは、1955年以前「小網代ランデブー」(マッケンジー氏別荘前)レース表彰式も行われていた。(「小網代昔話し」福永昭氏) (注:当時「ブ」を「ウ」に濁点で表現していた)
- ② 1965年「熱海ランデブー」(初回)が行われ、ヨット界で有名になった。この時「NORCヨット讃歌」が披露された。
- ③ 「夏祭り(兼表彰式)」の始まりは、1968年 於 シーボニア 初回は「カーニバル(仮称)」という名称だったが、翌年から「夏祭り」に改称された。
- ④ 「ランデブー」の復活は、1991年9月 KFRの「下田ランデブーレース」、ランデブー&レースの意味でランデブー(艇集合)の前または後にレースを行う主旨であった。この時は3艇が参加し、小網代から下田までのレース、下田で渡辺修治氏のご実家訪問など温泉一泊で宴会を行った。

いずれも50年以上前の話であるが、小網代ヨットクラブでは、「夏祭り兼表彰式」や「ランデブー」が伝統的に引き継がれて今も行われている。

この「ヨット讃歌」もいつの日か小網代の行事で歌い継がれる日がくることを祈っている。

2019.02.05 記

< 海・陸のちょこっと情報 >

編集子

ここに記載されていらっしゃる「熱海ランデブー帆走並歓迎委員長」、当時の熱海後楽園社長の田辺英蔵氏は、本年1月22日に91歳でご逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

昭和7年に創刊されたヨット・モーターボートの雑誌「舵(KAZI)」に、21年間連載された人気エッセイ「きゃびん夜話」をお読みになられた方も多かったことと思います。ジョークをまじえ、とても品のある楽しいエッセイでした。素敵なタイトルの「はきなれたデッキシューズ」の本や、日本初のダイビング用ヨット「蒼龍」(自称:潜水母艦)を建造されました。

なお、「蒼龍」は当初小網代湾に係留されていた(小網代ヨット史P128)が、シーボニアがオープンした時に同ハーバーに移動したそうです。



舵社 海洋文庫で「きゃびん夜話 30選」が刊行されています。